

次の――部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 花びんをツクエの上に置く。
- ② アンイに考えてはいけない。
- ③ 彼はチュウコクに耳をかさない。
- ④ 来客にエシヤクをする。
- ⑤ 銀行にチヨキンをする。
- ⑥ 地球のキゲンを探る。
- ⑦ この胃腸薬はよくキく。
- ⑧ 私はキシヨウ予報士になりたい。
- ⑨ 彼ははつきり意見をシュチヨウする。
- ⑩ 物資をユソウする。

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

子どもができたとき、いろいろと考えた。女の子だった。「どういうふう¹に育てようか」ということをやはり考えた。じっくり観察して、娘の持ち味をみることにした。自分の育ちを振り返って、これはわたしの確信に近いものになっているのだが、子どもにきまった教育法はない。子どもというのは千差万別²で、一人一人に向き不向きがあるから、そこを見極めなくては教育も何もないと思っ³ている。

というのも、わたしは自分の親や子ども時代を知る人に言わせれば、かなり変わった子どもであつたらしい。その話をきいてみると、**A**、自分が父親になれたことすら信じられない。小学校にあがつたかあがらないかの頃から、古いものが好きで、学校の勉強の埒外⁴へいはんいの外⁵にいた。自分の世界にいて、いつも好きなことをやっていた。

家に帰ると美術全集の「日本の城郭⁶」の巻をひらき、日本中のお城の名を憶え、一日中、その設計図を書いた。絵ではなく設計図だ。ほんとうに城をつくるつもりでいた。しかし現実⁷は厳しい。城の設計は無理だとわかった。あの複雑な屋根構造が、子どもには無理なのだ。昼飯中の建設現場の大工さんをつかまえて、「大工おじちゃん。瓦⁸の、のせかた教えてよ」と、しつこく聞き出し、自分なりに得た結論⁹だった。

そこで、子どものわたしは、美術全集に想像設計図が出ていた「伝説の出雲大社¹⁰」をつくることにした。いまの出雲大社ではなくて高さが一〇〇メートル近くあつた上古¹¹の出雲大社だ。その出雲大社は高すぎて嵐で倒壊を繰り返し、いまの高さ二四メートルの建築になつてしまつたと書いてある。これは成功した。近所の建築現場から材木の切れっ端をもらつてきて、庭に、ほんとうにミニ出雲大社を建ててしまつた。**B**、ある日、台風がきて、その庭のミニ出雲大社は倒壊していた。悲しかった。しかし、史実と同じ結果になつたことで、やはり本物の出雲大社も、こうして台風で倒されて、低くなつてしまつたのだ、ということが実感で伝わつてきて、身震い¹²するような感動も覚えたように、記憶している。

それだけではなく、化石も取りにいった。月の表面をはつきりみたくなり、本をたよりに望遠鏡をこしらえたこともある。レンズだけを買つてきて、水道管とガムテープと、ラップの芯¹³を組み合わせ¹⁴て望遠鏡をつくつた。それで土星の輪がほんとうに見えた

ときは、ぶったおれそうになるほど感動した。 [C]、縄文時代の竪穴式住居^{たてあなしき}に住んでみたかったから、木で骨組みをつくって、広場でススキをあつめ、そのうえにふき、できあがると、「縄文村」という表札を入り口にかけて、なかでウインナーをぼりぼり食べたこともある。近所のおばさんがきて、いきなり、子どもが竪穴式住居から出てきたものだから、 [X] ような顔をしていたのを今でも覚えている。

子どもの心は、きらめくような感動の瞬間の積み重ねで育っていく。その瞬間は、子どもが自然物とふれあつて格闘して実感で得られるもので、なかなか、人工的にはお膳立て^{ぜんだて}できないものだと思う。わたしは、子ども時代、ひたすら、やりたい放題の生活をおくった。親も変わったひとだったから、やらせてくれた。小学校五年生の時、石仏の拓本^{たっほん}をとってまわりたいといったら、父は、車を出してくれて、それから一年あまり、日曜ごとに小学生の石仏めぐりに、つきあつてくれた。

こんなことが、いまの私の何になつていくのかはわからない。わたしのついでにしている仕事は受験をくぐりぬけて大学や大学院に行かないと、普通はなれないものだから、試験や成績や大学の名前を勘定^{かんじょう}に入れないわたしは、途中、随分^{ずいぶん}、苦労した。いまだに、学生に対して試験などするのが、人間として大罪を犯しているような気がして、苦痛で仕方がない。数学者の岡潔さんだったと思うが、子どもには「するどい発見のよろこび」が大切だといっていた。人類が、知を獲得するための一番良い補助具は、やはり、発見のよろこびであろうと思う。わたしは、歴史家だ。みみずの這^はつたような字で書かれた古文書の文字のなかに、きらめくような一行があつて、だれもしらない真実をみってしまった瞬間がたまらない。いつやつてくるか知れぬ、その瞬間のために、生きていくようなものだ。生まれてきた娘にこれといって教えるものはないが、感動を知った人になつてほしい。そして、欲をいえば、なんでもいいからまわりにもその感動をわけてあげられるような人になつてほしいと思つている。

(磯田道史『歴史の愉しみ方』より)

問一 [A] [C] に入ることばとして、適当なものをそれぞれ次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(同じ記号を二度以上使つてはいけません)

ア また イ つまり ウ ところが エ そもそも

問二 ……部1「これ」が指し示す内容を二十字以内で答えなさい。(句読点も字数にふくみます)

問三 ……部2「千差万別」の意味として、適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 永遠に変わらないこと。
イ あれやこれやと考えをめぐらすこと。
ウ 多くのものがそれぞれ違つていること。
エ 言動がおろかしく、話にもならないほどであること。

問四 ……部3「自分なりに得た結論であつた」とありますが、どのような結論ですか。三十五字以内で説明しなさい。(句読点も字数にふくみます)

問五 〰〰部4「身震いするような感動も覚えた」とはどういうことですか。適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分で建てたミニ出雲大社の倒壊に昔と今の重なりを感じ、歴史を体感できたことに対して深く心を動かされたということ。
- イ 自分で建てたミニ出雲大社が倒壊したことで、子どもにできることの限界を感じるとともに、昔の技術の高さに驚いたということ。
- ウ 台風によってミニ出雲大社は倒れてしまったが、自分で建てること出来たのもう一度建てようと勇みたっていったということ。
- エ 台風によって倒れてしまったものの、自らの力でミニ出雲大社を建てることができ、何事にも挑戦することの重要性を強く感じたということ。

問六 X に入る慣用句として、適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 空飛ぶ鳥も落とす
- イ 鳩を憎み豆を作らぬ
- ウ 今泣いた鳥がもう笑う
- エ 鳩が豆鉄砲をくらった

問七 〰〰部5「学生に対して…」とありますが、筆者がそう思うのはなぜですか。その説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 子どもの頃の感動や発見は今の自分にとって大切なものであるが、学生にそれを理解させられないことを悔やんでいるから。
- イ きらめくような発見が人間の成長にとって大切だと思っているが、大学や大学院に行った自分にはそのような経験がないから。
- ウ 試験や成績は世の中では何の意味も持たないと昔は感じていたのに、大人になってその考え方が間違いであると気付いたから。
- エ 自然物とかかわることで得られる感動や発見が子どもを育てると分かっているが、仕事ではそれと矛盾した行動をとっているから。

問八 本文の内容としてふさわしくないものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 筆者は変わった子どもであったが、親も変わっていたので学校の勉強以外のことに没頭できた。
- イ 筆者は受験を経て大学、大学院へと進んだが、それまで学校の勉強をしてこなかったので後悔している。
- ウ 筆者はやりたい放題であっても、その中に感動や発見のよろこびがあれば、子どもは育つと考えている。
- エ 筆者は子どもの頃、好奇心に任じて自由に過ごしたことが今の自分をつくったかどうかはわからないと考えている。

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

ベンチに座って、敵も味方も観客もひきあげたグラウンドをぼんやりと眺めながら、徹夫へⅡ典子、智の父親・智の野球チームの監督へは煙草を一本吸った。強い風が煙を吹き飛ばしてしまうせいかな、煙草はいがらっぱいだけでちつとも味がしない。

「おとうさん」隣に座った智へⅡ万年補欠の野球少年へが言った。「いいの？ もうすぐ打ち上げ始まつちゃうんじゃない？」

「いいんだ、どうせ先に始めてるさ」

徹夫は笑いながら言って、ゆるんだ頬がしばまないうちにつづけた。

「智、今日、残念だったな」

「しょうがないよ、江藤くん調子悪かったし、向こうのピッチャーすごかったもん」

「いや、そのことじゃなくてさ……おまえのこと、試合に出せなくて……」

「いいってば」

声は明るかったが、顔はさつきと同じようにうつむいてしまった。徹夫と反対側の隣に座った佳枝へⅡ徹夫の妻へが、智の肩越しにこつちを見ていた。目が合うと、しょうがないわよ、と小さくうなずく。〈Ⅰ〉

典子へⅡ中学二年生・智の姉へは朝食を終えると、自転車で遊びに出かけたらしい。仲良しの友だちは皆、塾の模試を受けているのに、誰とどこで遊ぶつもりなのだろう。あてもなく自転車を走らせ、暇をつぶすだけのために本屋やCDショップを覗く典子の姿を思い描くと、腹立たしさよりも悲しみのほうが胸に湧いてくる。

がんばれば、いいことがある。努力は必ず報われる。そう信じていられることもは幸せなんだと、いま気づいた。信じさせてやりたい。おとなになって「おとうさんの言ってたこと、嘘だったじゃない」と責められてもいい、十四歳やそこらで信じることをやめさせたくはない。だが、そのためになにを語り、なにを見せてやればいいのかが、わからない。徹夫はフィルターぎりぎりまで吸った煙草を空き缶の灰皿に捨てて、智に訊いた。

「中学に入ったら、部活はどうするんだ？」

答えは間をおかずに返ってきた。

「野球部、入るよ」

佳枝が、「今度は別のスポーツにしたら？」と言った。「ほら、サッカーとかテニスとか」

A、さとしには迷うそぶりもなかった。

「野球部にする」

「でもなあ、レギュラーは無理だと思っぞ、はっきり言って」

「うん……わかってる」

「三年生になっても球拾いかもしれないぞ。そんなのでいいのか？」

「いいよ。だってよく野球好きだもん」

智は顔を上げてきっぱりと答えた。

一瞬言葉に詰まったあと、徹夫の両肩から、すうつと重みが消えていった。頬が内側から押されるようにゆるんだ。拍子抜けするほどかんたんな、理屈にもならない、忘れかけていた言葉を、ひさしぶりに耳にした。〈Ⅱ〉

徹夫は、ベンチから立ち上がった。

「ピンチヒッター、加藤！」

無人のグラウンドに怒鳴り、智のグローブを左手につけた。

「どうしたの？ おとうさん」

「智、バット持って打席に入れ」

「はあ？」

「ほら、早くしろ」

智の返事を待たずに、試合で使わなかったまっさらのボールをグローブに収め、マウンドに向かってダッシュした。

智がケースからバットを出す。佳枝も立ち上がって、「やだあ、埃ほこりすごいねえ」と風にあおられる前髪を手で押さえながら、とことくグラウンドに出てきた。

徹夫は苦笑交じりにグローブを佳枝に放った。佳枝はそれを両手と胸で受け取り、「どのへんで守ればいい？」と訊いた。「もっと、ずーっと後ろだ」

「そんなに飛ぶ？」

「あたりまえだろ、ホームラン、出るかもしれないぞ」

佳枝は「なに言ってるの」と笑ったが、可能性がないわけではない。風はホームベースから外野に向かって吹いている。智のアップスイングなら、うまくいけば——千発打って一発の割合だろうが、風に乗って外野の頭を越えることもありうる。〈Ⅲ〉

「三球勝負だぞ」

「うん…」

「内角球を怖こわがるな、後ろに下がると外角低めについて行けないぞ」

「はい…」

「返事が違うだろ、腹に力を入れて」

「オッス！」

「よし、そうだ。ボールを最後まで見て、くらいつくようにして振るんだぞ、いいな」

「オッス」

徹夫はマウンドの土を均なし、ボールをこねて滑りを止めた。B 山なりのスローボール、そんなものを投げるつもりはない。

レギュラー組の打撃練習のときと同じように、速球を投げ込んでやる。

C 、野球が大好きな少年に対する礼儀だ。

ワインドアップのモーションで、投げた。ど真ん中だったが、智は空振りした。完全な振り遅れで、バットとボールも大きく隔へだ

たっている。ボールを拾いに行く背番号16に、「しっかり見ろ！」と怒鳴った。

二球目も空振り。外角球に上体が泳いだ。

「腰が据すわってないからダメなんだ、いつも言ってるだろう！」

智は半べその顔で「オッス！」と返す。叱しかられて悲しいんじゃない、打てないのが悔しいんだ、と伝えるように、徹夫に投げ返す球は強かった。〈Ⅳ〉

最後の一球だ。手は抜かない。内角高めのストレート。

智はバットを思いきり振った。

快音とまではいかなかったが、たしかにボールはバットにあたった。

フライが上がる。ビュンと音をたてて、強い風が吹いた——が、打球は風に乗る前に落下しはじめ、佳枝の手前でバウンドした。

「ホームラン！」

佳枝がグローブをメガホンにして叫んだ。「智、いまのホームランだよ！ ホームラン！」と何度も言った。

徹夫も少しためらいながら、右手を頭上で回した。打席できよんとする智に、ダイヤモンドを一周しろと顎で伝えた。

だが、智は納得しきらない顔でたたずんだまま、バットを手から離さない。徹夫をじっと見つめ、徹夫もまっすぐに見つめ返してくるのを確かめると、帽子の下で白い歯を覗のぞかせた。

「おとうさん、いまのショートフライだよね」

来月から中学生になる息子だ。

あと数年のうちに父親の背丈せなほを抜き去るだろう。〈Ⅴ〉

徹夫は親指だけ立てた右手を頭上かみに掲げた。アウト。一打数ノーヒットで、智は小学校を卒業する。

不満ふまんそうな佳枝にかまわず、徹夫はマウンドを降りた。ゆっくりと智に近づいていき、声が届くかどうかぎりぎりのところで

「ナイスバッティング」と言った。

聞こえなかったようだ。智はスローモーションのようにバットを振って、ダウンスイングの練習をしていた。

「智、家に帰って荷物置いてから打ち上げに行こう」

「うん……いいけど？」

「帰ろう」

野球のルールをつくったのはアメリカの誰だったろう。

知らないが、ホームベースという言葉をつくった誰かさんに「ありがとう」を言いたい気分だった。

家——だ。野球とは、家を飛び出すことで始まり、家に帰ってくる回数を競うスポーツなのだ。

バックネット裏に停めた自転車に向かって、智と並んで歩いた。なにも話さなかった。黙ったまま帰ればいい。玄関には智より先に入るつもりだ。「お帰り！」と声をかけてやる。ホームインの瞬間を見届けてやる。

(重松清『卒業ホームラン』より)

問一 〰部1「その」が指し示す内容を二十五字以内で答えなさい。(句読点も字数にふくみます)

問二

A 〰 D に入ることばの組み合わせとして、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア(A) だが B それが C たとえば D いや

イ(A) だが B たとえば C それが D いや

ウ(A) たとえば B だが C いや D それが

エ(A) それ B いや C だが D たとえば

問三

〰部2「すうつと重みが消えていった」とありますが、この時の徹夫の心情を読み取り、五十字以内で答えなさい。(句読点も字数にふくみます)

問四

問題文中には次の一文が抜けています。〈I〉〈V〉のどこに入れるのが適当ですか。記号で答えなさい。
へそれを親が信じてやらなくて、誰が信じるというんだ……。〉

問五

〰部3「はにかんだ様子」とはどのような「様子」ですか。適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア はずかしそうな様子

イ いらいらした様子

ウ 急いでいる様子

エ あたりまえな様子

問六

〰部4「不満そうな佳枝」とありますが、何に対して佳枝は不満を感じているのですか。その説明としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 佳枝はこの場を穏やかにすませたかったが、智が佳枝の言葉を認めたくない様子だったから。

イ 智と徹夫が男同士の間だけでやりとりを進ませ、佳枝は相手にされていない感じがあったから。

ウ 智に良い思いをさせてあげれば良いのに、大人げなく勝負を挑んだ徹夫に納得がかなかったから。

エ 塾の模試も受けず遊んでばかりいる典子に続き、智までもが親に対して反抗的な態度をとったから。

問七 くく部5「ホームインの瞬間を見届けてやる」とはどういうことですか。適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ホームベースに戻る回数を競う野球において、その瞬間を見届けることは非常に意味深いものであるということ。
イ 最後の思い出として智と勝負をした徹夫にとって、ホームベースを踏む瞬間は大切なものであるということ。
ウ 智は一度もホームベースを踏んだことがないため、中学での活躍を期待しているということ。
エ 小学校の野球生活を終え帰宅する智を、父親として暖かく家で迎えてあげたいということ。

五國

得	点